

## アムステルダム「世界市場」への発展

宮 下 孝 吉

低地地方は西ヨーロッパの最も重要な河川、ライン、ミューズ、シエルトの三角洲の両側に広がっている。アイフェル、アルデンヌの山々は比較的低くかつ大いに浸蝕されていて大した障碍ではなく、ライン地方または中部ヨーロッパからの人間の侵透を決して阻まなかった。モーゼル、ミューズの溪谷は南方への接近を容易にした。さらに西方では、中部ベルギーおよび低地ベルギーと北フランスとの間には自然の障碍は存しない。ブリタニア諸島との交通も一層困難というわけではなかった。それ故に、地理的意味での *Nederland* (*Niederlande*, *Netherlands*, *Pays-bas*) は、最初から東欧と西欧、北欧と南欧との自然な交叉路または旋回台を形成していた。

しかし、一四世紀の八十年代（一三八四年）以前には「低地地方」は政治的概念ではなかった。かなり早くから、数多くの領邦が成立し、南部低地地方にはフランドル、ブラバント、エイノウ、ナミュール、司教領リエージュが発展し、北部低地地方ではホランド、ゼーランド、ヘルダーランドがあった。とくにホランドは一一世紀以来ウトレヒト司教領とともに北部地方の中核として発展した。領邦の若干はドイツ帝国に、若干はフランス王国に封建的に

隷属していた。そのなかでフランドルはその隣国よりも人口が多く政治的に強い組織をもち、その經濟生活とくに商工業が一層に繁榮していた。これに対して、ブラバント、ホランドなどの地方は經濟的にはフランドルよりも後進的であった。

低地地方の南部と北部との差異は中世では潜在的なものであったが、近世になって明確化した。南部はフランス人やフランドル人が住み商工業が盛んであり従って数多くの都市がさかえ、フランスおよびイギリスの影響が優越した。北部はシェルト、ミューズ、ラインの河口が水路網をなして運河や小島、ならびに沼地や海から干拓された陸地から構成され、海からの脅威をたえずうけていたので、住民は漁業や牧畜を行ない、そのなかではドイツ人の勢力が最も強かった。そこへ一六世紀には宗教上の争いが加わってきた。南部（『ベルギー』）は闘争の後カトリックの信仰をつづけるにいたったが、北部は当時の最も有力なイスパニア国王(1)に対して英雄的な闘争をして独立するに至る。

これより先き、低地地方は一四世紀末には政治的実体となつてしまつていた。すなわちブルグンド支配時代（一三八四—一四七七年）にフィリップ善長公（一四一九—一六七七年）は低地地方の大部分（フランドル、アルトワ、エイノウ、ホランド、ゼーランド、ナミュール、ブラバント、リンブルグ）を獲得してここに政治的実体を与えた。一五世紀の二—三十年代に低地地方に成立した政治的組織である「ブルグンド」（ブルゴニー）国家は、その後ハップスブルグ家の領土となり（一四七七年）、さらに十六世紀ではこの国家の継承者イスパニア国王に支配されるにいたり、その属領となつた。

一六世紀の最後の四半期にいたるまで低地地方の人々はイスパニアやポルトガルと親しく交際していた。しかし

七つの北部諸州（ホランド、ゼーランド、ウトレヒト、フリースランド、ヘルダーランド、オーファイッセル、フロニンヘン）がイスパニアから独立の宣言をしたとき（一五七九年）、彼らにはイスパニアの諸港（セヴィリア、カディスなど）が遮断された。まさに翌年イスパニア王フィリップ二世（一五五六―九八）がポルトガル王家の死滅を機会にポルトガル王位を兼ねるにいたったので、彼らにはリスボンの港を訪ねることをも許されなかった。まもなく商人たちは、かってブリュージュの場合にそうであったように、その本拠をすてて他所に逃がれアントウェルペンからアムステルダムに移した（一五八五年）。

以上の一般的動向を背景にして、先ず次節にアントウェルペンについて考える。

(1) 国王は低地地方のほかナポリ、シチリアを属領として地中海で優勢を占め、新大陸とくに南アメリカ植民地を領有し、ドイツ帝国と親近関係にあった。国内では絶対王政を確立して議会 (cortes) は無力となつてしまつた。

## 二

一五世紀末を特徴づけた地理上の大発見は、低地地方に影響を与え、この頃までもヨーロッパの仲継貿易の主要都市としての地位をその外港によって固持していたブリュージュは、その外港が土砂で埋まったので船舶に見捨てられ、新しい商船隊はアントウェルペンに集中するようになっていた。

アントウェルペンはシュルト河に沿う港であり、おそくも一〇〇八年にフランドルの有力な伯たちに対しドイツの国境を守るために帝国辺境伯の所在する都市となつた。一一世紀の末にブラバント領となり、一二九一年には都市法をうけ、一三一五年にハンザに加盟した。その頃の人口は約一万八千であり、最初の盛時をみた。それはブリ

ユーリュがその外港を土砂に埋められた頃である。その後、イギリスの羊毛や毛織物の商業がアントウェルペン經由で行なわれた。<sup>(2)</sup>

新航路の発見後、低地地方の人々がカディス、リスボン、内陸諸国との商品取引を奪ったとき、アントウェルペンの富は増大した。カール五世（カロー一世、一五一六—一五六）の時代には、この皇帝の強大な保護のもとにキリスト教世界の最も活潑なかつ最も富める都市となり、ポルトガル、イスパニアの植民地産物の通過貿易の中心地としてヨーロッパの最も重要な首都<sup>イトロポリス</sup>となり、ヴェネツィア、ジェノアの光彩を失わした。人口は一五六六年に一〇万となり、これは一五二六年の五万に對比して考うべき数字である。世界のあらゆる部分から船舶がシュルト河に入り、一時に百隻以上が出入したといわれる。アントウェルペンの祭市はさまざまな特権を認められた自由祭市であり、各国から商人を招集した。フィレンツェ人のギッチアルディニ (Lodovico Guicciardini, + 1568) はその生涯の大部分を商人として低地地方に送り一五六六年の輸出入を誌して、この年にはポルトガルからの香料・砂糖の輸入は一・五百万デユカーテン（フロロリン＝グルデン）、イタリアからの絹および金絲織物の輸入は三百万デユカーテン、バルト海からの穀物輸入は一・五百万デユカーテン、ドイツ、フランスからのブドー酒は二・五百万デユカーテン、ドイツからの全輸入は一二百万デユカーテンであったと報じている。千人を超える外来商人がアントウェルペンに居住し、アウグスブルグの大商人、フッカー家の一人は二百万デユカーテン以上の財産を遺した。

アントウェルペンは、既知の世界のすべての生産物のための大市場となった。ハンザ商人が壮大な店舗を開いていたロンドンはまだ「世界市場」ではなく、その「支所」の程度にすぎなかった。これに反して、ブリュージュは聳え立った障壁の背後で既に半死半生の状態であった。アントウェルペンは「すべての国民に共通な一つの世界」

の首都であり、商品商業の中心であったのみならず当時の主要な貨幣商業の中心ともなっていた。毎年二つの大祭市が開かれ、各祭市は二十日間つづいた。しかし、実際には永続的な取引が行なわれて、世界的なかつ一年連続する祭市の外観を呈した。ここには約一千の商家があり、ヴェネツィアで二年を要する商業取引が一月で行なわれたといわれるほどである。商人にも専門化が現われ、自己の計算で売買する商人のほかに、富める代理人、問屋の階層が発達してき、彼らの行なう投機は価格を規制する傾向にあった。貨幣はもとより豊富であって、金融市場として重要であったので、最も有力なドイツ、イタリアの銀行家たちがここに本拠を置いた。しかし、彼らは地金銀の輸出入を最小限にしようと努め、現代の小切手の先駆的形態である持参人払預り証の制度を用いた。古い市民である商人たち (patric) が獲得したよりも十倍いな百倍すらの資本をもつ人々が大きな企業を創めた。このような財産を作った人々は、古い類型の商人階級の息子たちは稀であって、新しい類型の商人である。古い類型の商人階級は商業の進歩において没落はしなかったけれども、政府の役人とか自由職業の供したヨリ平和的な地味な人生行路に逃がれ、新しい類型の人々は社会の下層から出身して、いかなる危険をもものともしない商業の眞の開拓者であり、彼らは巨富から破産の淵におちいる変動的な大奮闘の生活を耐え忍ぶのに必要であった。

商業における変化のみならず工業状態にも変化が現われた。古いギルドは特権を固守し都市の食料供給の統制をしたにすぎなかった。分散した大きな市場に供給していた繊維工業はギルドの統制からほとんど全く逃がれていた。「新しい毛織物」がフランドルの都市ガンで作られ始めた。ギルドの組織がそこで崩壊されたのは一五四〇年以後である。イギリスの織元の例に倣って、大きな毛織物マニファクチュア (集中職場) がアントウェルペンの富める市民の金融的援助で創設され、ギルトの制限一切を逃がれ労力は豊富で容易に入手できる農村に開設された。

彼らを選び得た二つの類型の組織のうち近世的かつ自由なものを躊躇することなく最初に採田したのは、絹子、平紐、天鷲絨、硝子という新しい製造工業であった。同様に、鉦山業や冶金業がリエージュ市の附近で行なわれた。この都市はエイノウに所在し、ミューズとオウルトの合流点にあるドイツと低地地方との交叉路にあたっているので有利な位置にあり、ナミュールにも近い。

このような輝かしい工業の展開は普通の職人大衆には利益を与えなかった。古い諸職の日雇職人たちは法外の料金によって禁制された地位である親方となる見込を失ってしまったけれども、少くとも親方と共に家庭的な親しみのなかで生活し、彼らが普通扱われた親切はギルドが借財を負うに従って動かなくなってしまう古い救済制度のますますつのる不能率を償っていた。しかるに他方、新しい労働階級は保護を全くうけずに残された。大きな集中職場工業は彼らの労働条件および賃銀について自ら満足することができた。というのは、労力は農村の何処からも容易に募集し得たからである。労働者は誰人のためにも自ら喜んで働らく過剩に存在した何らの連絡もない「無機的大衆」にすぎず、その数そのものが弱みの源泉であり、重大な抵抗をするためには駆り集め得られなかった。そこで、乞食や若干の慈善団体で授産教育をうけて貧民の息子や五ないし六歳の幼児すらを集中職場で働かせた。

労働者は郊外に設けられた一つの集中職場の出入口通路で生活するために、しばしば都市から移住した。他方、集中職場が都市に建てられた場合には、そこで備われた附近の地方からの労働者は毎晩自分の村に戻る慣習をやめた。既にかなりであった都市の数は、全部で一層増加し、フランドルの全体は「一つのつづいた都市」(ギッチャルディニ)であった。この都市無産者の運命は特に一五五〇年以後に不安全となった。このときには食物価格がこれに伴う賃銀の上昇なしに暴騰した。ここにおいて始めて、階層間の分化が見られる。この分化はその後二つの階

級に分れさせた。一つは賃銀のほかに何にも資産をもたない労働者大衆であり、他は貴族のように華やかな奢侈に耽っている富める製造工業家たちである。二つの階級間の距たりは大きく、その結果、中間階級として委託仲立人 (facteur, Winkelmeester) が発生した。彼らは三十ないし六十人の労働者を備っている農村の小職場を都市の雇主のために指揮した。雇主から原料を受取り、土曜毎に一週間の製品を引渡した。労働者は過度の困窮から反乱を起した場合もあるが、反乱者たちは武装に十分ではなく食料も不十分でありその上、宣しき指揮が欠けていたので、市民軍が彼らを鎮圧するのはさして難事ではなかった。富者は若干の劫掠された穀物倉庫の再建やパンの価格の一時引下げを行なわねばならなかった限りでのみ、被害をうけた。カルヴィニズムが導入されたときこれを受け入れたのは数多くの工業労働者たちであり、彼らは確立された秩序に何か変化が起れば幾らかの利益があると期待してカルヴィニズムを受け入れた。しかし一つの結果として、経済的および政治的闘争においては彼らは失うよりも得る者と考えた。アルヴァ公の暴政(一五〇八―八二)を追払うために彼らはストライキを声明する用意があった。

これらの社会的分裂に加えて、フィリップ二世時代のイスパニア絶対主義とカトリック主義とが低地地方に悲惨な結果をもたらした。異端の宗教的迫害(一五六七年以来)、そして、少くとも富裕な南部地方の支配を保持しようとする残虐な戦争は、多くの住民を他地方または他国に移住させ土地は荒廃された。アントウェルペンには二回包囲されその港は半ば閉塞され掠奪にまかされた。イスパニアに残ったものはアントウェルペンの死骸のみであった。田野は荒廃され、都市は人口減少をみた。狼がガン市の郊外に姿を現わした。アントウェルペンの貿易は、フィリップ二世がそこに地盤をきづいていた商人たちにアメリカや東インドとの直接貿易を一切禁止したとき(一五九八年)、致命傷をうけねばならなかった。

(2) これについては、増田四郎、宮下孝吉、高村象平、小松芳喬、五島茂著、『西洋經濟史』上巻、有斐閣、昭和三十年、一五一ページを看よ。

## 三

一六世紀末頃アントウェルペンが致命傷をうけて挫折したとき、經濟的優位は新教の北部低地地方に移った。北部はイスパニアの領土から解放されて「連合諸州」、すなわちオランダ共和国となった。そして、オランダの興隆とアムステルダムの繁榮とは互いに密接に結び付いている。

都市アムステルダムの存在する敷地はアントウェルペンに比べて有利であつたわけではない。この地は一二七五年に始めて都市的定住地として史料にあげられており、一三〇六年に都市法を獲得した。都市アムステルダムはアントウェルペンのように城塞をかまえた「都市以前の定住中核」<sup>3)</sup>の附近に発生したのではなく、沼沢地のなかに埋没するのを防ぐために打込んだ数多くの杭の上に築かれた。海からは遠く入り込んだ場所に港があり、東風のときには出帆に困難であつた。水深が浅いので貨物の積卸には舁こを使用せねばならなかつた。この点ではアムステルダムよりもまさつた港はヨーロッパには少なかつた。出入りが困難でありかつ敷地が水成であるのは不利であつたが、しかし、その反面、河陸からの攻撃に対する防禦上の利点によってこの不利は補われた。テキセルやフリーはアムステルダムの船隊の集結には自然的・合理的に保護された前進港であり、河川や運河による低地地方の他の諸都市、ドイツやフランスの隣接地域との連絡交通はこの時代には比類がなかつた。順風であれば、また潮やコースの変更を必要とせぬときは、アムステルダムからフリースランド、オーファイッセル、ヘルダーランド、北ホランドへ、またこれと逆の方向に船で往復することができ、南ホランドの諸都市その他近隣の内陸都市からアムステル



ダムに短時間でしかも低廉にかつ容易に達することができた。

アムステルダムはガンやブリュッセルに比べると三―四世紀おくれで、一六世紀の中頃以前に盛大な商業を築き上げた。この商業は低地地方の人々がその敵とするハンザ商人の顔色なからしめてしまっていた漁業とバルト海通商とに基づいていた。このことは後述するが、注目されねばならない。しかもこの初期の商業は拡大されて、主として穀物、ピッチ、タール、金属類、麻類、魚類について北歐ヨーロッパと、主としてブドー酒や塩についてフランスとの間の運送業や通過貿易を包含するようになった。

しかしながら、一六世紀の中頃にはアムステルダムは自己の通商に必要とする以上の余剰資本やこれを運ぶ船舶を大して持っていなかった、この都市は穀物、材木、魚類をよく貯蔵しているので知られたが、商人たちが各種商品を相当な量で取引し得るアントウェルペンやハンブルグのような一般的互市場となるにはほど遠かった。当時アムステルダムは地中海地方や大洋の彼方の諸地方と直接の海上商業関係を開いておらず、その市民は繁栄しつつあったけれども向上的なきわめて富める人々のグループはまだ存在していなかった。アムステルダムの商人は取引所をもっていなかったので、天気の良いときには戸外で、わるいときには一つの礼拝堂で取引のための会集をした。この都市はまだ銀行をもたず、抵当貸を行なう免許高利貸をもっているにすぎず、為替の諸慣例はアントウェルペンから借用されたが、商取引では現金が原則であった。まさにアムステルダムの諸工業はフランドル諸都市の工業よりも未発達であった。

このような状態から――当時の人々には「突然に」――アムステルダムは十六世紀の最後の一年から一七世紀の最初の十年にわたる約四半世紀の間に「世界的な」経歴に登場した。アントウェルペンは既に述べたように一五

八五年にバルマ侯に降服した。その港が閉鎖されてフランドルやブラバントの著名な諸都市が孤立し貧困化した。セヴィリア、リスボンは反抗的なオランダ人には法律上閉塞されていたし、リスボンは敵の諸港との通商上の大利益のために大冒険を賭することを辞せなかったけれども、損害は時として破滅的であった。対フランス貿易は宗教戦争によって変調をきたした。

これらの変化と危険とに当面して、オランダ商人はイタリア、トルコ、ギニー、南北アメリカ、極東への直接通路を求め、ロマノフ王朝の初代皇帝の即位後にはイギリスのモスコウ会社（一五五年特許）の特権的地位にもかかわらず、ロシアの貿易において第一位を獲得した。<sup>(4)</sup>この急速な商業拡大は低地地方の南部諸州の破壊された諸都市、ポーランドやドイツ、イスパニア、ポルトガル、フランスやイギリスから追放された数千の避難民の流入により一部分は刺戟されかつ一部分は可能にされた。

ホランド州およびゼーランド州の都都市はこの新しい営利の機会、その技術、営利心や熟練によって利益を与えられたが、最も多くの新人員の補充を得たのはアムステルダムであった。新たに市民権 (Poorterschap) を取得した者は一五七五―七九年の五年間には三四四人足らずであったものが、一六一五―一九年の五年間には二、七六八名に増加した。この新しい市民は大多数が世帯主であり、生計を得る諸方法については市民権は必要でなかったから、市民権取得者の増加はウトレヒト連合（一五七九年）に続く半世紀における来住による都市人口総数の増加を示すものである。戦争によって踏荒らされた地方のなかにあって、アムステルダムは確平不動とされていた。希望にみちた商業および海運の状態は他の諸地方から実業家を吸引した。開化した共同社会すらも宗教的不服従を抑圧し外人たちに差別待遇をした時代に、アムステルダムの市門はあらゆる宗教や国籍に対して開放されていた。<sup>(5)</sup>市民の

身分は一六二二年まではフローリンで取得され得、この年に十四フローリンに値上げられた。市民たることはギルドへの加入や小売商業を含む特定の職業への加入には必要であつたけれども、この市民の特権は徹底的には実施されなかつた。外国貿易や大多数の卸売商業は非市民にも開放されており、またギルドを組織しなかつたかなり多くの工業もそうであつた。特定職業にあつては市民権を守るよう要求している市参事会 (Vroedschap) が戒告をくりかえしたのは、その違反がしばしばであつたことを暗示している。外来の職人の受入にはアムステルダムはギルドの反対と妥協し、新来者のために家屋を建て、新しい工業を創始し、または既に確立した工業における技術を改良し得ると思われた親方たちにさまざまな勧誘を申し出た。<sup>(6)</sup> 次第に、定期航海業がアムステルダムをランダ共和国における主要な商業都市、南部低地地方および南西ドイツにおける数都市、ルアンやロンドンと連結した。貿易の必要に應ずるため郵便業務が拡大された。かくして、港と市場とが、延長された半徑一帯に接近可能となつたのである。

都市アムステルダムの統治者である市参事会は、通貨状態の改善、資本のための安全保障の供与に努力した。商事件、海事事件、保険事件を取扱うために特別裁判所が開設された。保険会議所が一五九八年に開設され、一六〇二年には連合東インド会社が特許された。新取引所は一六〇八年に始まつていた。一六一六年には市参事会は穀物取引所の建築を決議し、為替銀行は一六〇九年に設立され、貸付銀行は一六一四年に創立された。

アムステルダムの関税収入は一五八九年から一六一七年の間に二倍以上となつた。人口も増加した。一五一四年には一・一・二万であつたが一五六七年には約三万となり、一五八五年にはこの数を大して超えなかつた。しかるに一七世紀の初めには一〇万の都市となり、一六二二年頃までには一〇・五万に達し一六三〇年までに一・一・五万

となり、一七世紀の第三四半期の末以前には二〇万を超えていた。<sup>(7)</sup>この人数を收容するために市域はくりかえし拡張され、それには杭打ち、防禦工事、運河の構築、橋梁の築造に大きな費用を支出した。ヨーロッパの各地から来訪者を含み、この女王のような都市の富と美と人口の多いことに彼らは驚嘆の眼を開いた。早くも一六〇〇年にはロアン侯は富と美においてヴェネツィアを別にすればヨーロッパではアムステルダムに比敵する都市はないと公言し、一七世紀の三十年代の中頃、極東に旅したところのあるオレアリウス(Adam Olearius, 1603—1630)はインドにおいてすらもアムステルダムのことを住民が語っているのを聞いたという。

(3) 拙著、『西洋中世都市発達の諸問題』一条書店、昭和三十四年、二二—二三ページ、一六〇ページを看よ。

(4) 最初のオランダ商館はアルハンゲルに設けられ一六〇〇年頃には数商家の代理人がいた。アルハンゲルはナルヴァにとつて代わり、毛皮貿易はオランダ商館または代理人の手中にあった。

(5) アムステルダムの宗教的自由主義は、この世紀には顕著であつたけれども、アルミニウス教信徒の迫害時代(一六一七—一九年)、ローマカトリック教信徒やユダヤ人に対する差別待遇によって失敗に帰した。尤もユダヤ人の取扱は一時の間かなり寛容であつた。

(6) 一六一二—三二三年に市政府から相次いで奨励された企業には、絹の仕上げ、毛織物の製造、アイロンを使用する毛織物の仕上げ(糊付け)、革の鍍金、鏡の製造、塩の精製、造船、鮭漁業に参加する二橋漁船の嚮装があつた。この政策は十七世紀の後半に継続され、一六八〇年以後の十年間に市民権を取得したフランスの新教徒たちは約二、〇四二人であり、これが最高記録である。

(7) アントウェルペンの人口は一七世紀の初には一〇万から五方に減少した。P. Geyl, *The Netherlands in the Seventeenth Century*, London 1961, p. 162; M. M. Postan-E. E. Rich-Ed. Miller (ed.), *The Cambridge Economic History of Europe*, Vol. III, Camb. 1963, pp. 13—14.

## 四

他のヨーロッパ都市すべてに對して一七世紀のアムステルダムが卓越したのは、先ず第一に海運の中心地としてであり、第二に商品市場としてであり、第三には資本のための市場としてである。このような地位に最初からあったのではなく、アントウェルペンの地位を継承したにすぎない。ところで、この継承はアムステルダムの位置の有利性によって決定されたのではなく、有利な位置を利用したためである。またアムステルダムの卓越性が現われた上述三つのうち、いずれが最も重要であったかは確言しにくいけれども、たしかなことは貨幣市場としてのアムステルダムの強みは、海運中心地としてかつ商品市場としての卓越性から發達してきたといえよう。

I 航海は造船および関連産業を刺戟した。海運は、地方的を超えた重要性をもつアムステルダム最古の有用な資産であった。一五世紀の中頃にはブルグンドのフィリップ善良公はアムステルダムを「有名な港、低地地方におけるわが全領土のうちで商人の最も多い都市」としており、一四三八―四一年にバルト海のハンザ諸都市に對して行なつた海戦にはアムステルダムは軍艦二十隻以上を供出したといわれ、この数はホルランドおよびゼーランド州の他の諸都市全部が供出した隻数を超えている。一六世紀の中頃にはアムステルダム港に出入りする船のマストや積荷の雑踏を一つの「森林」にたとえた外人の一訪問者があつた。この比喩はその後の人々によりしばしばくりかえして用いられた。レスター伯ロバート・ダッドレーの統治時代（一五八六年）、伯に随行した一英人は「この都市は一、〇〇〇隻の船を所有し、その最小のものも一〇〇トンであり、このほかに他の船および小さな船をもっている」と述べた。一六一七世紀にはおどろくほどの数の非常に大きな船がアムステルダムを訪ねた。オランダの造船

所がフルート (fluit) といわれる船を造り始めたのもアムステルダムが首都的な地位に急速に向上したこの時期においてであった。フルート船は乗組員が少なく、従って運行に費用がかからず航海能率のよい貨物船であった。<sup>(9)</sup>この船型の成功は、とくに嵩高なる重量品を運搬するヨーロッパ通商の大部分の輸送部門をオランダ人の手に入れ、運賃をオランダ人の懐中に入れしめた。この船型はアムステルダムの創始ではなく、アムステルダムがこの型の船を大いに建造したのか、それともノルウェイ貿易の急速な発展により造船用の木材および板材の多くが供給されたためにすぎないのかの問題は今日未決である。

アムステルダムにおける造船および水上輸送の成長を実証するのは、一五八〇—一六〇四年に造船または運航に従事している一、〇八三人が市民権を取得した事実である。このうち、過半数——その以前の居住地が記録されている七四五人のうち六七七人——は外国からの避難民ではなく、北部低地地方の諸都市の出身であり、その大多数は北ホラント州およびフリースランド州の出身であった。明らかにこのような仕事は小さな海港都市や村落におけるよりもアムステルダムでは報酬がよかった。家屋や船舶に使用する板材の需要に刺戟されて、一六世紀末の発明にかかる機械製材が一五九八年からアムステルダムで操業した。もとの所有者の二十年間の独占が消滅したとき(一六一九年)には、製材所はこの都市の郊外で急増した。だが、ザインダムでは製材所は一層多かつた。十七世紀の初年代ですらもアムステルダムの船大工は大きなかつ有力な型の船の建造に集中した。これよりも低廉に造船し得たザイン川に沿う村々その他の場所に不本意にも貨物船の建造を残したようである。<sup>(9)</sup>その建造された場所はいづにしろ、フルート船は運賃をかせぐためにアムステルダム港に集まった。この一大商品市場は全船隊の積荷を買集めて迅速に帰荷を供することができた。これは運賃率を引下げオランダならびに外国の海運を誘引する。その結果、

イギリスやフランスの商人たちは目的とする外国によりも「先ずアムステルダムに運んでそこから他の場所に運ぶのが最もよかった」。

II 商品市場としてアムステルダムはその地位をアントウェルペンの降服以後、一般的互市場の地位にまで完成した。外国人はアムステルダムに赴けば美術品から船艦にいたるまであらゆる物品の供給を期待することができる。アムステルダムの取引所で売買された物産は世界貿易の重要商品である。その範囲および種別は小さな諸市場で参考とされる標準であった。そして、アムステルダムでの価格はヨーロッパ実業界の指標として役立った。価格は一五八五年から毎週印刷された。以前にも配布されたのかも知れないが、一六一三年には宣誓仲立人たちは、一年四フロリンで誰人も予約し得る公式価格表を編修しつつあったので、処罰された。オランダでの価格表はホランド、ゼーランドにのみならず、アントウェルペン、ブリュッセル、ダンチヒ、コペンハーゲン、ストックホルム、セヴィリア、フィレンツェ、ウィーン、バタヴィアに頒布された。同様の価格表は商品の会所取引の行われ<sup>(10)</sup>た二三の他の都市にも印刷された。

アムステルダムに商品を委託積送した商人は、その商品が早く販売されその代金が速かに支払われたので、手取金を投資する機会を幅広く選択することができた。彼らが価格の上昇を予期して財貨を貯蔵しようとしたときには倉庫預り証を担保にして資金の融通をうけることができ、または彼らは比較的少額の関税を支払って財貨を再輸出することができた。大多数の商品は「再び出て行くためにアムステルダムに入ってきた」といってよい。全世界の市場状況の専門的な知識、商品の評価や類別についての熟練、消息に通じ変化に即応する仲立料や手数料および卸売、さらに信用や保険ならびに為替の施設などはみな一七世紀のアムステルダムでいまま

でない最高の發展度に達した。

この世紀の初めに一時的または永続的な代理人をアムステルダムにおいて売買させていたイギリス、イスパニア、フランス、デンマーク、スウェーデン、オーストリア、ロシアの統治者たちは、その取引において常に必ずしも好都合ではなかったが、他の場所では有利ではあり得なかったので、やむを得ずアムステルダムでの取引を承認した。船用品や軍需品についてはアムステルダム以外には十分資力のある市場はなかった。一八世紀の前半においてすらもアムステルダムはたびたびの戦争により、また仲継貿易を阻止する傾きのあつた内外のマーカンティリズム的諸制限により縮少されたけれども、依然としてヨーロッパ大陸の第一の市場であつた。商人や銀行家が諸外国に送金した貨幣額において、倉庫に充満されたがたえず商業のなかに出入りして地球のはてまで運搬されるほとんど限りのない商品数において、アムステルダム市は世界商業を行なう大都市の一つであつた。

Ⅲ 一七世紀の初年代にはオランダは資本の蓄積において世界の他の諸国を急速に凌駕しつつあつた。アムステルダムは國際的な貨幣市場としてのデノアやヴェネツィアと最初は競争し、次には追越し始めた。都市政府は既述のように一六〇九年為替銀行 (Wisselbank) を設立して各国の通貨の無秩序な状態から生じて國際商業に与える諸種の支障を除去するために全力を尽した。この銀行の紙券は何処でも先導した。アムステルダム銀行は、アムステルダム取引所と同様に、諸国によってしばしば模倣された制度であつて、一八一九年に解散されるまで貨幣の両替・預金・振替を行う銀行として機能した。これは公立銀行であり、この種の公立銀行の存立または宣しき経営にとっての危険は、銀行を特許した政府に銀行が貨幣を提供せねばならぬ点にある。アムステルダム銀行もアムステルダム市に貸付けて信用を損つた。



この銀行の初期（一六〇九—一二年）における最大の預金者三二〇人のうち半数以上は南部低地地方からの来住者であり、一六三一年における二百分の一ペニー税賦課からの評定報告は最も富めるアムステルダム人の三分の一が南部出身であったことを示している。フランドル人やワルーン人は金融や外国貿易以外の分野で顕著な貢献をし、彼らは極めて利益の多い毛織物の卸売、絹・絞織子織ダックスその他の織物や衣服装飾品の生産に従事した者が多かった。また、硝子の製造、ダイヤモンド磨き、宝石の細工、金細工、革の仕上げ、砂糖の精製にも従事した。都市アムステルダムの工業の洗練化と多様化とは彼らの来住の時から始まった。

一六世紀の末および一七世紀の第一四半期にアムステルダムに逃がれたポルトガルまたはイスパニア出身のユダヤ人、いわゆるマラーノスたちの富は誇張されているように思われる。一六一〇年には約一百世帯しかなかった。これらのユダヤ人は銀行の設立または東洋貿易事業のいずれにも大して参加者を供しなかった。若干の資本を必要とする貿易部門（ポルトガル、イスパニア、バルベリ、ブラジル貿易）の資金を融通することはできたけれども、彼らの資力は成立期のアムステルダム資本主義に勢力と可動性を与えるに十分なほど大ではなかった。しかし、イスパニアとの二十年間の休戦中（一六〇九—一二年）に、またオランダ西インド会社（一六二二年設立）によるブラジルの征服が開発のための適当な分野を開いた四十年代にも、アムステルダムのマラーノスたちの富は急増した。かくて得られた「はずみ」はブラジルをポルトガルに奪われた後ですらもお生きていた。

一七世紀の後半にはアムステルダムのユダヤ人は他のヨーロッパ商業都市やレヴァント、バルベリ、ブラジル、西インドにおける類似のユダヤ人諸団体の神経中枢となった。ユダヤ人は絹、砂糖、タバコ、ダイヤモンド産業に従事しまた出版業にもたづさわったが、そのいずれにおいても彼らは優勢を占めなかった。しかし、会社持分券の

売買は大部分がポルトガル、イスパニアの投機人たちの手中にあった。アムステルダムやハーグには極めて富めるユダヤ人が住んでおり、この団体の成員の平均的な富はおそらく高かったけれども、一六七四年の二百分の一ペニ―税賦課評定報告からみると、西方ユダヤ人の富は同類のキリスト教徒の富に比べると依然はるかに劣っていた。

(8) 拙稿、「十七世紀初期におけるイギリス毛織物貿易の不振」『國民經濟雜誌』第一〇二卷第一号、六ページを看よ。

(9) アムステルダムでは一六六五年には七十四の製材所が稼動しており、一六七八年には八十となり、絹燃糸、リボンの捺染、毛織物の縮絨および艶出し、革の仕上げ、搾油、火薬の製造、銅板の圧延に用いられた風車があった。

(10) 例えばロンドンでは一六七〇年頃から印刷されたが、そのいづれもが影響力においてアムステルダムの価格表に対抗し得なかつた。というのは、それらはアムステルダムの価格、大きな取引量、大多数の商品に基礎をおいていたからである。

## 五

世界市場としてのアムステルダムをそれ以前の「世界市場」と比べると、歴史上どのような異同が認められるであろうか。

アムステルダムが「世界市場」として登場したのはしばしばふれたように一六世紀の末および一七世紀の第一四半期においてであった。この地位は一八世紀の前半を通じて持続された。この時期は、ヨーロッパにおいてはそれ以前のヴェネツィアおよびアントウェルペンが支配した時代と同様に、一つの都市がその自ら有する権利によって經濟上君臨する時代であり、このような性格をもつ時代の最後の時期であった。そこで、歴史上の差異を明らかにするために、次に經濟史の動向を一瞥することしよう。

北歐商業圏と地中海商業圏とを連絡していたシャンパーニュの祭市が一―二世紀の最盛時を迎えた後衰えてか

らは、当時の「世界」（ヨーロッパ）商業の中心は低地地方に移動した。フランドルのブリュージュが先ずシャンパーニュの祭市の地位を継承して、一三世紀には国際的な商品交換および金融の中心地として登場した。今日において取引所を意味する *bursa* (*bourse, Börse*) なる言葉はイタリアではなくブリュージュに起り、低地地方から伝えられ広がったものであるが、中世における商取引は一般に現実取引であって、現実の物財を点検しさらに売買契約成立後それを秤量測定して直ちに引渡していた。従って、取引所の発達はあまり望まれ得ない状態であった。しかし、北欧から送られる鯡については例外的に銘柄による先物取引が行われ、また稀には未着品取引（未だ刈取られない穀物または未だ剪採されない羊毛）についても先物取引が行われた。

ヨーロッパ最初の取引所は両替商、銀行家、公証人などの参加する為替取引所であって、イタリアの商業中心地には内国商人の取引を中心として取引所が生じ、一四世紀には主として国内為替を取扱う銀行業者によって発達された会所取引が取引所取引の性格をもつようになった。イタリア商人は外地では一五世紀の中頃にロンドン（ロンドン街）で為替取引の萌芽というべきものを始めたが、大陸ではブリュージュの取引所はイタリア商人によって起され、一五世紀の末には商人たちはヴァン・デル・ブルセ家の邸宅に日々会集して為替取引が行われた。一六世紀に入ると先物取引は次第に普及し、この世紀の九十年代には普通の取引形態の一つとなった。この発展において重要なのはブリュージュの地位を継承したアントウェルペンにおける胡椒の先物取引と為替相場の賭博的な歩金取引 (*portinas*) の開始である。

商品商業および為替取引の中心地であるアントウェルペンには投下を求める資本が集まり、大きな商社は必要な貨幣額を借りる機会が常に与えられた。貨幣の不足にしばしばおちいった帝王たちはアントウェルペンの取引所で

借款をした。勿論、彼らは最初は高い利子を払ったのであり、高利を払っても所要額を常に入手し得たわけではない。それは彼らの支払能力に対する信頼がしばしば欠けていたからである。

アントウェルペンには物産取引所があり、委託販売が大いに重要となった。一六世紀の経過中に商品商業が為替取引に附け加わってきた。これはインドから輸入された胡椒、後にはイギリスの毛織物、北欧の鯡などの商品であった。数多くの商人たちがアントウェルペンに滞在し、彼らはいまや中世の場合のように同国人のみならず他の国籍の商人からの委託によって営業した。ポルトガル人の居留地は一五七〇年には約七十家を数えたけれども、特に重要であった。この居留地には二人の領事があり特定種類の係争事件に領事裁判権を行使していた。迅速でしかも費用の低廉な手続で処理され、居留地の商人たちにはとくに有利な状態が作られた。アントウェルペンにはポルトガル国王の代理人が駐在して国王の商取引を司った。アントウェルペンのイスパニア人居留地は法律的には居留地ではなく特別裁判権を有する役人をもたなかったけれども、別の特定の重要な特権をもっていた。普通は、ポルトガル・イスパニアの商人は南方諸国の重要な商社を代表する代理商にすぎなかった。この代理商は少くとも一六世紀の中頃までに仲立人や金融代理人として活動した。しかし、一六世紀の後半にはこれらの機能の分化が起った。

アントウェルペンの取引所は最初は午前十一時（後には十時）に始まり正午を過ぎると閉じた。このほか午後六時頃から始まる夕刻取引所もあった。各国籍人は彼らに特有な席を取引所の建物内部にもっていた。しかし、土着商人の取引を含む大多数の取引は外部で行われ、公証人の事務所や商人の勘定場で契約が結ばれた。取引所に武装して入ることは禁止されたが、これは容易に実行されなかったようである。

アントウェルペンの破壊およびその取引所の衰微は、これと同じ頃起ったリヨンの為替・資金取引所の衰微と

共に、一六世紀を包含する取引所取引發達史上の第一期を終らせ、第二期が始まった。これはアムステルダム取引所と密接に関連している。アムステルダムにおける取引所取引の重要な対象物は、証券とくに東インド会社の持分券、「株式」であった。証券取引所の成立はアムステルダムがアントウェルペンと「世界市場」として区別される差異の一つである。

アントウェルペンの商品商業のみならず銀行業務や為替業務の多く、そして、さまざまに完成された諸工業の若干は、アムステルダムによって継承された。しかし、この継承はアントウェルペン破壊以前に既にアムステルダムが獲得していた北欧産物および海上運送の重要な市場としての位置に接木された結果とみるべきであろう。これに反して、アントウェルペンは嵩高商品の貿易に第一次的には利害關係をもっておらず、それを動かす海運業がなく、また十分な貯蔵設備をもっていなかった。配給そのものは外来商人の來住により發達していたとしても、自らの海運・倉庫の未發達であったことは、アントウェルペンが「世界市場」としてアムステルダムと区別されるもう一つの差異である。

このことを説明するにはさして困難ではない。先ず第一に、市参事会の構成をみよう。一六世紀の末および一七世紀の第一四半期におけるアムステルダムの市参事会に代表された財産の大部分はバルト海貿易や漁業および船舶の所有から、またはオランダ牧畜業から發している。最も数多いのは穀物商人、材木商人、鱈商人、干鱈商人、魚油商人およびバター・チーズ商人であり、これに次いで多いのは消費用または輸出用原料の加工を兼ねている卸売商人、例えば石鹼製造人となった油商人・加里商人とか製索製帆所を開いた亜麻・大麻商人であった。次に、一六六六年にはアムステルダム取引所で活動していた資本の四分の三はバルト海貿易に従事していたと評定される。

アムステルダム銀行の預金者の数は一六一六年には七〇八人であったが、一七〇一年には二、六九八人になっており、預金額は同じ期間に九二五、五六二フローリンから一六、二八四、八四九フローリン（ただし一七〇〇年）に増加した。これらの預金者のなかには、国際金融に関係をもった数多くのアムステルダム資本家がある。そのうちでヘール（Gear）家とトリープ（Trijp）家は最も成功した軍需品商人であり、三十年戦争中にド・ヘール（Louis de Gear, 1587—1652）のアムステルダムにおける倉庫はスウェーデンのグスターフ・アドルフ王およびオランダ議会の軍隊にだけではなく、デンマルク、フランスその他の補助軍にも供給した。ウエストファリア条約（一六四八年）以後には軍需品の需要は減じたけれども、「戦争の世紀」といわれる一七世紀の後半にはロシア、帝国（事実上はオーストリア）、ブランデンブルグ、イスパニア、フランス、ヴェネツィア、トルコやバルベリ海賊の諸戦役はアムステルダムの貨幣市場を活潑にした。

戦争のみならず飢饉はこの都市の富を増大させた一因である。ヨーロッパのかなりな部分での穀物の不作はアムステルダム穀物取引所における穀物価格の騰貴や高い運賃に反映し、その結果として都市全体の商工業への刺戟となった。豊作のときにはこれと逆の結果が生じた。これはアムステルダムがアントウェルペンの破壊以前から行なっていた穀物および船用品の貿易とこれらやその他の嵩高品の運搬・貯蔵・配給によってその主要な富を獲得していたし、またアントウェルペン破壊後も獲得しつづつあったためであり、ただ以前の時代においては「世界市場」とはならなかったにすぎない。

かく考えてくると、アムステルダムがその破壊された競争者アントウェルペンの分捕品で懐を肥やしたとしばしばいわれる非難は当らないことになる。

一七世紀の初と終との百年間にプラハ、プレスブルグはハップスブルグ家の領土拡大の結果、シュトラスブルグはルイ十四世による獲得（一六八一年）の結果、キエフはロシアへの吸収の結果、いずれも地方都市におちたが、その代りに新しい政治的意味の首府が四つ現われた。聖ペテルスブルグ、トリノ、ハーグ、ベルリン、これである。アントウエルペンはイスパニアの支配が一六世紀におとした衰頹状態からは回復せず、アムテルダムは一六四八年以後、新旧世界の貨幣市場となった。この点においてはアムステルダムとアントウエルペンとの差異は程度上の差異にすぎない。

(11) 彼らはリエージュから相当な財産をもってアムステルダムに移住してきた人々である。

(12) 一七世紀にはそれ以前の大都市の若干（リスボン、アントウエルペン、ミラノ、ヴェネツィア）は収縮しつつあり、ロンドン、パリ、ウィーン、アムステルダムその他小さな場所が大いに増大した。この世紀の末には人口一〇万以上の都市が十三ないし四を数える。そして最大の都市パリ、ロンドンはその頃までに二五万をはるかに超えたといわれる。アムステルダムも二五万であり、既述のように少くとも二〇万を超えていた。